九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

河原五郎著『河原徳立翁小伝』

宮地，英敏
九州大学附属図書館付設記録資料館産業経済資料部門 ： 助教授

https://doi.org/10.15017/4247

出版情報：エネルギー史研究 ： 石炭を中心として. 22, pp.95-114, 2007-03-27. 九州大学附属図書館付設記録資料館産業経済資料部門
バージョン：
権利関係：

【資料紹介】河原五郎著『河原徳立翁小伝』

宮地英敏

本書は、明治日本の陶磁器業界および博覧会・共進会に大きな足跡を残した河原徳立について、五男の河原五郎が執筆した伝記である。非売品であったこと、発行部数が極少数であったこと、福岡で印刷されたことなどの要因が重なり、平成十九年二月時点では国立国会図書館ＯＰＡＣや、ＮＡＣＳＩＳ Webcat等でも検索することができず、現物を殆ど確認できない。一部に落丁が見られるが、書籍の希少性も鑑みてその全文をここに復刻するとともに、別本を所有する方からのご連絡を待つ次第である。復刻に際しては㈱ノリタケカンパニーリミテド社史編纂室所蔵本を利用した。ここに感謝の意を表したい。

詳細は本文をご覧頂きたいが、河原徳立について簡単に紹介しておく。河原徳立は一八四四（弘化元）年に幕臣の家に生まれた。御徒組の銃隊に属し徳川家茂・慶喜両将軍上洛に際しても従い、大政奉還後は駿河田中城に移住した。しかし廃藩置県後には明治新政府に出仕し、式部寮、大嘗祭御用掛、内務省勧業寮などに勤める。幕臣時代の俳諧の素養や、在京都時代の美術品鑑賞や陶芸経験に加え、勧業寮でウィーン万国博覧会事務局附属製陶所の主任となった縁から、河原徳立の人生の方向性が定まっていく。

河原はウィーン万国博覧会終了後、附属製陶所に集まった職工を率いて瓢池園（ひょうちえん）を創立した。瓢池園は、明治前期における日本の美術品輸出の中心となった、起立工商会社（ウィーン万国博覧会を契機に設立）を主たる取引先として経営を始める。[1] ところが、起立工商会社は杜撰な経営から明治十年代後半には経営を縮小せざるを得なかったため、瓢池園は主たる取引相手を森村組へと転換した。この森村組こそが後に日本陶器合名会社（現㈱ノリタケカンパニーリミテド）を創立することになる。ちなみに森村組と取引をしていた時代の瓢池園の製品は、オールドノリタケとしてコレクターズアイテムになっているものの一部である。[2] また河原は広くその技術やデザインを同業者に公開し、さらには博覧会・共進会の審査官等として、日本陶磁器業の底上げにも邁進している。

明治二十年代中頃になると森村組は、綿密に調査した海外市場動向の情報を製品デザインに生かすため、次第に取引相手の専属化と名古屋へ

の集中を試みる。[3] しかしこの考え方は、瓢池園経営を安定的に行うと共に、日本陶磁器業界の技術水準の向上をも企図していた河原徳立とは相容れなかった。一八九五（明治二十八）の専属化に続き、一八九八（明治三十一）年には一部の、一九〇三（明治三十六）年には完全な名古屋移転を迫られると、河原は長男の太郎に瓢池園を譲って京都に引越してしまう。河原太郎に譲った頃の瓢池園は、雇用職工六十人を数える上絵付工場であった。そして徳立は従来にも増して、陶磁器美術および技術の発展を願って博覧会・共進会活動等に専心していく。

京都では京都美術協会や大日本窯業協会に協力する傍ら、一九〇六（明治三十九）年にはふくべ焼京都工場（京都瓢池園）を始めている。ふくべ焼京都工場は、河原徳立次男の次郎が広瀬満正（広瀬宰平長男、一八五九～一九二八）の娘婿となった関係から、両者が共同出資で設立した窯である。[4] その後も、美術工芸品の展覧や品評会の開催を聞くと、京都を中心に全国に足を運んでいたが、一九一四（大正三）年八月二十五日、京都遊陶園例会に向う直前に脳溢血で倒れ、七十一年の生涯を閉じた。遺骨は谷中霊園および南禅寺金地院に分骨埋葬されている。

本書の復刻にあたり、漢字は基本的には新字体に改めた。また適宜句読点を補った。

注

（1）起立工商会社の経営に関しては宮地英敏「起立工商会社と政府融資」『東京大学経済学論集』第七十一巻第四号、二〇〇六年を参照のこと。

（2）オールドノリタケについてはコロナ・ブックス編集部『オールド・ノリタケ』平凡社、一九九七年が、図録およびその解説としてまとまっている。

（3）森村組による上絵付工場の専属化に関しては、宮地英敏「明治期日本における「専門商社」の活躍―森村組を事例として―」『企業家研究』第二号、二〇〇五年、四十一～四十三頁などを参照のこと。

（4）ふくべ焼に関しては大槻倫子「京都瓢池園―まぼろしの京焼―」『茶道雑誌』二〇〇六年四月号を参照のこと。瓢池園の名古屋移転後に小規模ながら成形工程も含めて美術工芸品を作り、これをふくべ焼と称していた。

付記

今回の資料紹介は、科学研究費補助金・若手［B］「近代日本陶器業にみる複層的な経営の存在について」の研究成果の一部である。

河原五郎『河原徳立翁小伝』

例言

一、曩に先考在世中其の談片を記録したるもの並に我が家に残存したる書類を基とし、慈母叔父及長上諸兄に就き、前後の事情に関して教示を得たるものを輯め、不肖文筆に拙なるを顧みず一書を編して自ら記念の料とせり。

二、先考逝きて今や方に十五年、長兄亦既に其の跡を追ひ、追慕の情転切なるものあり。会々瓢池園旧友諸氏より本書刊行の懇請を受けたるを以て、遂に意を決して旧稿本を筐底より出し、廣瀬百木二兄の援助を仰ぎて印刷に附せり。

三、瓢池園の作品は概ね海外に輸出せられ、僅に若干の写真を留めしも既に脱退変色し、本書に収むるもの亦原版小型に過ぎ瓢池園風画様の妙趣を明かにすること能はざれども、唯其の一端を示さんとするのみ、敢て大方各位の寛容を請ふ。

昭和四年八月　於福岡寓居

男　五郎誌

徳立翁小伝目次

巻頭写真目次

序文

一　明治維新前後の徳立翁

生立ち—河原家に入る—将軍家に随ひ再度上洛—幕末政変の頃—府中より田中城に閑居—帰東し官途に就く—陶磁工芸に対する趣味—澳国博覧会附属製陶所に於ける業績

二　瓢池園の事業

一、瓢池園の経営

明治六年八月瓢池園創立—陶画焼成の苦心—輸出陶器業経営の困難—陶画改良に着手—明治十三年富川町に工場移転—明治十五年前後の苦境—明治二十年林町に工場移転と共に事業漸次発展—明治二十八年営業方針の革新—森村組との提携—明治三十二年輸出部陶画工場の名古屋移動—本邦輸出陶器業の活躍—美術部製陶工場に新式石炭窯構築—ふくべ焼の産出—明治三十九年ふくべ焼工場の京都進出—大正三年園主没後廃園

二、工人の奨励及保護

幼稚なりし我国工場経営に斬新なる諸施設—休日慰安—月末賞与金積立法—瓢池園功級規則—共済会

四、陶画工の養成及訓練

明治初代の陶画工—明治十四年以来養成を企画—徒弟寄宿舎—育成の方針—其の諸施設

三　陶業界に於ける業績

一、陶画の改良

松脂油応用画付法の成功—改善進歩の普及に努力—顔料調製と焼成に苦心研究—銅版盛上画付法の実施其他

二、国立製陶所設置の議

本邦陶器改良の急務を痛感—模範製陶工場設立を画策—国立製陶所設置の建議—日本陶器合名会社の出現—陶業界に対する所見

四　工芸界に於ける事績

一、内外博覧会に於ける活動

明治初年外国博覧会に関係―第一回内国勧業博覧会に参与―内外博覧会の閲歴―博覧会への熱愛―藍綬褒章拝受―熱誠なる審査方法―博覧会を以て公生涯を終始一貫

二、実業団体に対する斡旋

夙に我国特産品の海外輸出に着目―商業道徳の振興を提唱―同業組合法制定の運動―組合法発布大祝賀会―東京陶磁工同業組合を組織―各種商工業組合及各地美術協会に尽力―全国窯業品展覧会開催行啓を奉迎

五　性行と趣味

仁慈の性―江戸子気質―多様の趣味―晩年―逸話―家庭

一　明治維新前後の徳立翁

翁は弘化元年十二月三日、江戸小石川字極楽水に生る。父は旧幕府金座年寄佐藤治左衛門信古にして蕉廬と号し、和漢の学に通じ詩歌をよくす。其の遺稿に広葉集及蕉廬詩鈔あり。母は渡邊直之進睦親の女琴子なり。翁幼名を五之助、後に五郎と云ひ、明治三年、更に徳立と改む。安政五年十二月、歳十五にして旧幕府御徒士（オカチ）組頭河原与一郎和市徳茂の嗣子となり、徳川十四代将軍家茂に仕へ、徒士見習を命ぜられ、翌年二月、本徒士に進み七拾俵五人扶持を受く。

元治元年一月、将軍家茂公の上洛に従ひて京都に赴き、慶応元年、軍制の改革に際し銃隊に編入せらる。同二年十二月、杉田秀悦の二女鐐子を娶り、下谷車坂町に住居す。翌年三月、第十五代将軍慶喜公の上洛に随伴して再び京都に至り、十一月交代帰東せり。此の秋に際し、徳川幕府政権を奉還し、王政維新となるや、譜代の諸侯及旗下の士にして恭順の意に従はざるもの多く、先づ伏見鳥羽の地に戦端を発し、次で全国諸藩亦動揺せり。

明治元年五月、旧幕臣の間に彰義隊と称へ、江戸上野東叡山に集合して官軍に抗し、幼主を擁立せんとする者八百余名に及べり。同月十四日、翁は同志二十六名と其の暴挙を戒めん為め上野に向ひしが、諸門は既に固く閉されて入るを得ず。転じて浅草米廩に赴き、臨機の策を講ぜんとせしが、翌日に至り上野は官軍の重囲に陥り、激戦の末彰義隊は多数の死傷者を遺棄して潰走し、其の本営たりし寛永寺も遂に砲火のため焼失したるを以て、同志は再会を後日に約して解散するに至りしと。

明治元年六月静岡藩の置かるゝに及び、広間組申付けらる。同年七月、府中城受領のため藩庁にて雇入れたる米国船に乗り、品川を発して清水港に上陸し府中に到着せり。是れ即ち今の静岡市にして、広間組とは城の内外警護に任ずる役なり。同年十月、家族同伴のため帰東し、翌月、駿河志太郡田中城内に移住せり。

当時の藩士は即ち旧幕臣にして、駿河遠江の二ヶ国に分散閑居し、各戸二人扶持の給与を受け、其の後五人扶持（一人扶持は一ヶ年玄米一斗五升）に加増せられしも、素より家族を支ふるに足らず、概ね赤貧洗ふが如く見えたり。曽て田中城内にて農夫より里芋一升を求む。其の価当時にて百文（一銭）なりしが、財嚢空しく後日を約して帰らしめたり。他日農夫来りて支払を請求するや、近隣二三の知人に百文の借銭を乞ひたれども応じ得るものなく、更に他の知人に至りしが彼亦他に乞ひ、辛うじて急を凌ぎ得たりと云ふ。翁夙に俳諧の道に志し、雅号を夜継庵得之と称し、宗匠の格に在りしを以て、俳句添削の料を受け家計の一端を

補ひたる等、以て当時士族の窮乏を察するに難からざるべし。

明治三年廃藩置県の令出づるに及び翁は単身上京し、時勢の変遷を観察して大に感ずる所あり翌春家族を伴ひ、東京深川に帰住して式部寮に入り、明治天皇御即位式に際して大嘗祭御用係となり、続いて内務省勧業寮に出仕せり。是より先元治元年、将軍家茂に随ひ京都に至り公務の余暇、神社仏閣を尋ね、優秀なる名画大作に接するに及び、美術工芸殊に陶磁の趣味を喚起し、屡々清水粟田の製陶場を巡覧せり。慶応三年、再び上洛したる時は、啻に新古各種の陶磁器を愛玩したるに止まらず、公休を利用しては自ら製作に親しみ、之れに関する知識と鑑識力とを養ひたり。維新後田中城趾に閑居せるとき、半里を隔つる藤枝町近郊に万古焼風の陶器を作るものを訪ねて、製陶の法を研究し是を詳にしたりと云ふ。

明治五年、日本政府が澳太利万国博覧会に賛同するや、特に事務局を内務省中に置き大に出品を奨励せり。同年五月同局副総裁故佐野常民伯の推奨に因り、其の附属事業として陶磁器製造所を東京浅草芝崎町日輪寺内に設けたり。翁此の時庶務会計主任に挙げられ、東京市内及各地方より優秀なる画工四十余名を召集し、服部杏圃氏を以て其の主席となし、所要の白磁は全国著名なる陶産地より集め、是れに絵画又は紋様を彩画し、優良なる作品の製出に努めたり。

従来我国の一般陶磁器上絵付は、俗に云ふ猪口画と称する卑俗なるものに過ぎざりしが、若し之れを紙本又は絹素に描ける国風絵画の如く、高尚ならしむるを得ば海外輸出の途開かれ、国富を計るに足るべしとなし、其の仕法を説き意匠を授けて工員を指導し、技を練り案を凝し、一意専心佳品の製作に精進す。超て翌年二月、出品物を搭載すべき郵船出帆の時期迫るに及び、殆ど徹宵其の完成に努力したりと云ふ。果然是等出品物は博覧会場裡に異彩を放ち、忽ち一般観覧者の注目する所となり、多大の賞讃を博し本邦製品の声価頓に揚れり。其の発送期限後に於ける残余製品が、勧業寮所属博物館内に陳列せられたる時、京浜在留の外人にして参観する者甚だ多く、克く原価の二倍乃至三倍の利潤を以て尽く売約せられ、尚追加注文の応接に忙殺せられたりと云ふ。該製陶所は斯くの如き多大の効果を挙げ、同年六月閉鎖せられたり。爾来専ら内外博覧会の事務に鞅掌し、明治十二年官を辞して後、自己経営の陶業に奮闘努力し、明治の陶業界に一新記録を残すに至れり。

二　瓢池園の事業

一、瓢池園の経営

明治六年、澳国博覧会事務局附属製陶所の閉鎖せらるゝに当り、翁は我が陶磁器を改良し、外人の嗜好を察して広く彼の需要に応ぜんか、其の輸出業は前途頗る有望にして、国家を利すること鮮少ならざるを確信し、製陶所の事業を継続拡張し、進んで官立模範工場となさんことを当局に建議したりしが容れられず、因て私設事業として是れが目的を遂げんとし、出資者を求むるため奔走大に努めたり。然れども如何せん、当時此の如き新企業に投資せんとする者なく、遂に兄弟諸氏と謀り、僅に三百金の資本を以て居宅を兼ねたる小工場を深川区東森下町に設けたり。

而して其の経営を出資者中の一人に任じ、前年来、澳国博覧会事務局附属製陶所にありし技倆最も優秀なる画工数名を聘用し、外祖父渡邊翁の継嗣吉弥氏及守田直信氏を助手たらしめ、翁は公務の余暇、朝夕自ら意匠を考案し指導顧問の任に当れり。時は明治六年八月にして商号を瓢

池園と称せり。園名は実に祖父信古翁の名づけたる所、蓋し翁の邸宅は深川森下町瓢箪堀畔に存し、邸内にも亦瓢箪の池ありしが故なり。工場は建坪二十七坪外に五坪の窯場あり。経三尺及二尺の絵付窯各一基を備へ、作業は主として花瓶、香炉の類に絵付焼成するものにして、素地を尾張瀬戸、肥前有田、京都粟田、清水及薩摩諸国の製陶家より求めたり。素地は特に形状紋様を案出して作らしめ、是れに各種の彩画を施して横浜在留の外国商人に売込み、或は起立工商会社の手を経て輸出せり。

因に云ふ。同社々長は故松尾儀助氏、副社長は故若井兼三郎氏にして政府の補助を受け、支店を海外枢要の地に置き、本邦美術工芸品の直輸出に従事し、其の業績大に見るべきものありしが、明治二十五年、事業に頓挫を来たし終に解散するに至れり。此の間約二十年、同社が我が美術工芸品、殊に陶磁器販路を海外に拡張し、且つ各種工芸品製作家を援助せる功績は、我海外貿易史上より決して没却するべからざるものなり。

由来我が国陶画なるものは、意匠、技術共に甚だ幼稚にして品位に乏しく、殆ど絵画又は図案として見るべき価値なく、到底具眼社の趣味を満たしむるものなかりしかば、我が瓢池園は既に澳国博覧会事務局附属製陶所に於て試みられたる改良の端緒を継承し、絹素に描くが如く高尚優美なる絵画を陶磁器に適用せんことを理想とせり。未だ工業用諸材料調はざる時代、改良と言はんより寧ろ開拓に等しく、意匠、画材、描法及顔料等、事毎に多大の研究を要せり。茲に花鳥、山水を描かんとすれば、先づ諸大家の画譜を蒐めて参考に資し、或は実写を試み、歴史的画題によるときは、史料を繙き故実に従へり。次ぎに艶麗閑雅なる色彩を濃淡意の如く現はさんとすれば、顔料の撰択、其の調合と焼成（焼付け、及火熱）の研究を要せしなり。其の当時に在りては現時の如く、顔料専門製造家の輸入品により同一火度に於て自在の呈色を求め得るが如き便利は想像すべくも非ず、溶解度を異にするものは各別に再三焼成して漸く所期の色彩を得たり。而も測熱の知識全からず、一に経験上の火色に頼るのみにして、火度の過不足に左右せられ、連日作業の苦心は彩画の丹精をも空しうし、常に廃物を製出せしめたり。科学的に何等の基礎なき当時の工作には、此の如き技術上の苦心を要せしのみならず、営業上殊に製品販売の方面に於ても亦幾多の困難に遭遇せり。

蓋し明治の初期には海外に於ける需用嗜好の程度全く不明にして、当初僅に美術品として其の珍奇を愛翫購買せられたりと雖も、広く永続的販路を求めん為には実用品に就くを可とすべきも、其の需用と嗜好とを確むるの途乏しく、是を以て外国博覧会の開催せらるゝ毎に必ず出品し、販路の拡張と共に嗜好の傾向を知り、或は欧米より帰朝する者あれば其の所見を叩けり。然れども各人見る所を異にし、時に帰結に迷ふ所ありしかば、依然美術品の製作に従ひ、其の創業の理想を確守し、一意優秀品を作らんと努力せしかば、往々製作費のみ嵩みて売価之れに伴はず。而も実用品と異り、一度商況不振に際すれば滞貨は金融を妨げ、画工の給料及原料の購入支払にも窮乏を告げ、経営上甚だしき苦境に陥りしこと一再ならざりき。

明治七年、士族授産のため家禄奉還金百弐拾余円を下賜せらるゝや、其の全部を瓢池園に於ける陶画研究費に投じ、工夫改良に費したるを以て、花鳥、山水、人物の極彩色密画より水墨の粗描に至るまで、悉く絹紙に対するが如く自由に陶画を描出し得たり。斯くて製品漸く精巧の域に進みしかば、所謂瓢池園画風、別称東京画付の名声次第に邦内に喧伝せらるゝに至れり、明治八年、米国費府（フィラデルフィア）万国博覧会に出品したる高さ尺

余の磁器花瓶は、簾内に坐して盛装せる貴嬪の容姿を描写し、緻密巧妙を極めたるものにして、費府博物館は米貨一千弗を以て之を購入せり。又同十一年、仏国巴里大博覧会に出品せる一対の花瓶は高さ三尺にして、上古より近世に至るまで本邦史上に著名なる人物を、数多の扇面散し内に描きて風俗の変遷を示し、別に開閉自在なる陶製檜扇を添へ、左右に赤銅並に銀製の桜花を散らし、陶器に金属装飾を配する先鞭を着けたり。蓋し開閉自在なる陶製檜扇の如きは、今日の技巧も尚且つ至難とする所なるべし。尚之れに対して夙に欧州の文物に通暁し仏文に堪能なりし、男爵故平山成信氏を煩はして詳細なる解説を添へたれば、当時在仏中の西園寺公望公之れを一見し、意匠高雅にして製作優美なる真に国光を宣揚するに足るものなりとし、仏国某貴族を紹介せられ、直に金貨一万法（フラン）を以て売約に応じたるなど、如何に瓢池園作品が我が国工芸美術発輝に関与せしかを知るに足らん。

既に創業の困難を排して事業を進め、起立工商会社及び森村組を初め、東京横浜等に於ける貿易商との取引漸く隆盛を来すに至れり。明治十一年、翁は仏国巴里万国博覧会に公務を帯びて出張し、帰朝後官職を辞し、自ら瓢池園に関する一切の事業を経営し、明治十三年、工場を深川区富川町に移転せり。其の建坪四十五坪、窯場八坪にして、内径二尺乃至三尺の絵付窯三基を備へ、特選したる良画工十三名の外雑工五名を使用し、新に女工五名を加へたるは、東京陶工界に於ける一飛躍たるを失はず。且つ之に先立ち使用顔料の水溶き法に代ふるに、外国製顔料と油溶き法とを適用し、益々描画法の精巧を発輝し、作品の品位は容易に他の追従を許さざりき。

明治六年創業以来、製作技術に関して種々の苦辛を嘗めたれども、営業状態は寧ろ順調を以て進みたり。然るに同十四年末より経済界に恐慌起り、物価は日々暴落して収支償はず、遂に多大の欠損を招き負債を生ずるに至れり。是れ独り瓢池園のみならず、当時京浜に於て瓢池園に做（ママ）ひ、輸出陶磁器の彩画に従事したる幾多の工場も亦同一の運命に陥り、概所属の工人を解傭して廃業せし者多し。その後明治十八年後半より、欧米輸出貿易の商況稍々回復の曙光を現はしたりしが、三年有余営業の継続困難の結果、負債山積し償還の督促急にして瓢池園工場の維持甚だ危かりしかば、停滞したる製品材料は勿論、衣類、什器を売却して一部債務の償還に充当し、僅に倒産の悲境を脱し得たりと云ふ。

蓋し翁は単に個人の営利のみを念とせず、国利を鑑みて陶器輸出業を発達せしめんが為に、一家窮乏を告ぐるも斯業と共に斃れて後已むの決心を以て、百折屈せず千挫撓まざる奮闘を継続せしかば、従業の工人も亦克く此の意を諒し、薄給に甘んじて共に職を執りたる心情、寔に感ずるものありき。

当時東京横浜等に於ける輸出陶器の絵付業は、概ね画工自らの家族と二三の徒弟とにより営まれ、窯炉は恰も現今娯楽的に使用せらるゝ楽焼窯の如き頗る小形のものを居宅の軒下に築造し、名実共に家庭工業の範囲を出でず。故に一旦不況の際は休業或は転業して糊口を見出すこと難からず、忽にして幔幕或は旗、看板、際物類の画工に、又は友仙染（ママ）の下絵師と変ずる事殆ど常態とせしが、瓢池園は規模小なりと雖も、常時既に工場組織の形態を備へ、分業法を採用し、画工は各其の技の長ずる所に従ひ画様及顔料によりて担当を定め、顔料の調整及焼成に就ても、多年の経験を積みたるものを専任者となし、技術の熟練を遂ぐるに便なりしが、一度休業して工場を閉鎖せんか、工人の多くは転業により生活の

糧を得ること難く、又他日再び是等熟練の技能者を集結せんとすること容易ならず。故に翁が奮闘的なる工場経営には、多くの工人も亦能く其の意を体し、敢て其の工場を去るもの無く、窮乏の間猶且つ業務を維持し、一日も之れを放抛すること無く数年を経過せり。

軈て商況恢復し、一時殆ど杜絶したる陶磁器輸出の途再び開かれ、活況を呈するに至りしかば従来の方針を改め、日用の食器類を主とし、美術的装飾品の製作を従とし、明治二十年三月、工場を本所区林町二丁目に移し、別に居宅を其の附近に構えたり。工場の規模は、平家建二十七坪にして外に十二坪の窯場あり、絵付窯四基を備へ、工員を増加し、男画工二十三名、女工七名、雑工五名を使用せり。

明治二十七八年戦役は、我が国威を海外に輝かし、併せて対外貿易の発展を誘致し、同業者中には四五十名の画工を使用するものあるに至れり。我が瓢池園も工場拡張の必要に迫り、明治二十八年五月、深川区東元町に存在せる旭焼製陶所を買収して移転し、其の設備は画工場二棟、附属建物二棟、総建坪百三十四坪、外に窯場二十坪、本窯一基、素焼窯一基、絵付窯五基にして、画工は男五十四人、女十三人、雑工八人、計七十五名を数ふるに至りぬ。

当時本邦より海外諸国に輸出する工芸品は、陶磁器、金属器、紙器、木竹製品等多種多様に渉り、貿易市場に於ては之れを総称して雑貨と称へ、数量価格は累年増加せしも、之れが取引に当る外国商館は徒らに仕入価格の低廉なるを望み、為に粗製濫造の弊を生じ、遂に海外需要者の信用を毀損し、自他共に其の弊に苦しむに至れり。此の間に処して独り森村組は、夙に日米両国間の直輸出業に従事し、此の弊害を打破せんことに勉め、仕入品は毎個見本に対照して厳重なる検査を行ふに幾多の煩労と経費の増加することを厭はず、専ら商品本位による堅実なる商策を実行せしば、雑貨貿易殊に陶磁器輸出に在りては、米国市場に於ける信用を博し、相継で注文殺到の盛況を呈したり。

是に於て陶磁器主産地に近く、又海陸交通の便ある名古屋に大製陶所の設立を企画し、先づ之が端緒として、従来取引関係先なる東京諸陶画工場の名古屋移転を勧誘せしを以て、瓢池園も亦明治三十二年五月、名古屋に輸出陶器の画付け工場を移し、森村組専属画工場となれり。而して本邦陶磁器の最大需用地たる米国は、人工の増殖と経済の発展とに伴ひ、我が輸出貿易をして比年順境に赴かしめ、殊に日露戦争終結せる明治三十九年の如きは、本邦陶磁器の輸出価格八百万円を超過し、諸工場は未曽有の活躍を呈し、瓢池園に属する工人亦約二百名を算するの殷盛を見るに至りたり。是より先森村組は、既に企画したる日本陶器合名会社を名古屋市則武町に設け素地の改良製造を開始し、進んで絵付業をも直営するに至りしかば、明治四十二年、之れを同社の経営に移譲し、瓢池園は茲に輸出陶器絵付事業を廃止せり。

東京に於ては明治三十五年一月まで前工場に、美術工芸部のみを存置して営業を継続せしが、翌年五月、同じく之れを名古屋に移し、同市主税町に小工場を新築して石炭窯を構築し、単に絵付業に止まらず素地の製造をも開始せり。本邦に於ける個人営業の工場に於て、陶磁器の焼成に在来慣用せる薪材を以てせず、石炭を使用して成功せしめたるは、蓋し瓢池園を以て嚆矢とすべきか。但し是れが成功には二年余の日子と、多大の労資とを費して遂に実行可能の技を嬴（ママ）ち得たるなり。斯くして製作せるものを「ふくべ焼」と称し、特殊風雅なる製品を出し、大に愛陶家の注意を惹けり。瓢池園が創業地東京を去りて、全部名古屋に移転す

ると同時に翁は京都に居住し、工場の管理を其の長子に譲り、更に明治三十九年、ふくべ焼工場を同市三条蹴上に新設移転せしめ、親戚広瀬家と共同の経営に改めたり。然るに其の敷地は明治四十二年、京都第二疏水拡張工事の用地となりて、更に七条大宮通西入に移転するに及び、老齢事に堪へざるを以て監督の任を辞し、爾来広瀬一家の手に帰せしが、大正三年翁の没後全く廃業するに至れり。

明治六年、瓢池園の創立以来、同四十二年、名古屋工場を日本陶器合名会社の事業に移譲するまで三十七年間、所謂瓢池園画風を興し、東京絵付なる範を全国に垂る。此の間、我国内に於ては第一回内国勧業博覧会を初め、各地方の産業共進会、又澳、仏、西、英、米、豪州等の世界万国博覧会に出品して得たる名誉大賞及金銀銅各種の賞牌及褒状等数ふること凡そ六十有余に及べり。

二、工人の奨励及保護

明治初期に於ける本邦古来の工芸は概ね住居を工場とし、家族及数名の徒弟と共に従業する態の所謂家庭工業にして、輸出陶磁器絵付業も亦其の軌を一にし、其の製産品は東京、横浜、神戸に居留せる外国商人、或は売込商、直輸出商の手に依て取扱はれたり。故に僅か数十、数百個の需用に対しても、規律伴はずして忽ち粗製濫造の弊に陥り易く、又は納期を完ふする能はざりしを常とせり。明治中期以後、欧州文化に做ひて創設せられたる各種の大工場と雖、製産の基幹たるべき工員の待遇、保護、指導を深く考ふること稀なる時に際して、翁は其の営める陶画業工場が未だ規模小なりしにも拘らず、現代工場組織に普く適用せらるる諸施設に留意したるは、真に先見の明ありしと謂ふべし。

故に創立記念日、又は正月仕事始め祝日には現今工場に実施せる慰安会様なる会合を催し、夏季中食休憩の時間を利用して興味ある遊戯をなさしめ、暑熱の候長時間坐職する画工に対して清新の休息を与へ、春秋郊外旅行の好時機には工場使用人全部を引卒して鎌倉、江の島等の勝地を遊覧し、自然の風光に親しましめ心身慰安の途を講じたる等、現今大小の商店、工場が経営の必要条件として取扱ふ所の従業員に対する公休日の制定、休養、娯楽の方法をば卒先実施せり。

尚部下工人の為に月末賞与金積立法を設け、毎月の勤怠と成績とにより、賞与金を与へて積立て置き、疾病、老衰に由る生活難に備へしめ、五年以上の勤続者には退職又は死亡の際、之れを払渡す事とせり。別に瓢池園功級規則なるものを設け、工人中永く勤続したる者、業務上有益なる発明新案をなしたる者、又特に職務に精励せる者に対しては、其の功績を表彰し、等級に従ひて褒賞を与へ、勤続中は年金を下付し、或は一時金又は賞品を贈与する事を以てせり。更に工人の相互扶助救済を目的とする共済会を設け、毎月最小一口拾銭を拠出し疾病、負傷及災害に対する救助に充て、其の他一般義損の資に供したるものあり。

是等は何れも今日緊要なる社会施設法規として制定せらるゝに至りしが、明治二十年時代、既に其の範をかゝる小工場内に見たる如きは真に出色の挙と謂ふべし。されば瓢池園工場は、場主、工員共に其の職を楽しみ、今の所謂労働争議の如き未だ曽て見ざる所なり。一度足を工場内に入るゝ者は、直に靄然たる和気の存するを観取せざる者なく、常時斯界に其の良習美風を称へられたり。

三、陶画工の養成及訓練

明治の初期、陶磁又は絹紙に絵画を能くしたる者は、全国を通じて、不破素堂、曽我徳丸、島内真山、木村立峯、小花輪一楽、佐竹永邨の諸

氏にして、其の後に大出東皐、平林東丘、松本芳延、羽田秋峰、加藤加松齊氏等出づ、其の多くは皆瓢池園に関係せるものなり。然れども一般陶画工は凧絵又は看板絵師の類にして、概ね教養乏しく品性下劣なりしため、此の徒を介して陶磁工業の真趣を表現し、気品ある作品を出さんことは到底期待し難く、加ふるに優良なる後継者の乏しかりしを憂ひ、明治十四年以来、其の養成を企て、先づ陶画工が世間より軽視せらるゝ風を改めんとしたり。明治十八九年頃には、東京女子職業学校の嘱託を受け、老練なる画工をして生徒中の有志数名に陶画法を教習せしめ、又後年、東京高等工業学校に於て陶画及一般工芸図案に就て講座を担当したることあり。

瓢池園が陶画工を養成せんとするに当り、徒弟の年齢満十二歳以上、尋常小学卒業程度の学力ある者に非ざれば雇傭せざりし如きは、現行工場法規を卒先実施せしものなり。而して父兄の家に起臥する者の外は、園内寄宿舎に入舎せしめ、食料被服等一切を給与し、常に六、七名の徒弟を収容して起臥を共にし、同宿の先輩を以て取締に任ぜしめ、自ら親しく教育に当れり。世の所謂徒弟、丁稚、或は小僧なる者は、多く家事の雑用に追はれて修業を妨げらるゝに鑑み、常に家族を戒しめ厳に之れを禁じ、昼間は現業により、夜間は先師に就き、邦画及読書を修めしむるの途を講じたり。

凡そ作品の品位は、製作者の人格に従ふこと大なるものあるを以て、徒弟をして常に言語、動作に留意し、品性の陶冶に勉めしめ、公休には劇場、寄席其の他娯楽の場所に遊ぶよりは、博物館若くは美術工芸に関する展覧会等の参観、或は由緒ある神社仏閣の訪門、郊外名所旧蹟の遊覧を奨励せり。其の修業年限は一定せずして各人の才能に従ひ、出入には殊更に雇傭関係の規約を設くることなく、紹介を信じて入園を承諾したる後は、相互に徳義を重んじ、来る者は拒まず、去るものは追はず。是の故に克く教化薫陶に服し修業したる者は、永く其の園風を思慕せざるものなかりき。

斯の如くにして徒弟を養成し、更に工人をして陶画の技術を練磨せしめんとするに当り、元来重粘なる鉱物質より成る顔料を以て陶画を描かんとするとき、運筆難渋の域を脱せしめんとせば、先づ普通絵画の練習を必要とするが故に、工員をして業務の余暇自習せしむ。之を奨励するには毎年新年宴会の席上、是等有志者の手に成る絵画を展覧し、園主並に園内先輩画工の審査によりて擬賞を行ひ、常に其の研鑽を促したり。尚研究の参考資料として、古今諸画家の稿本其の他の図書を備へて、随時閲覧に供したる如きは、現今大工場が設備する図書室の用意に似たり。

又輸出向日用磁器の絵付には、草花の類を応用すること多かりしを以て、東元町工場に小花苑を設けて四季の花卉を栽培し、工員徒弟の写生、賞鑑の用に供せしことなど、彼の著名なる丁抹コペンハーゲン陶工場の施設に似たる趣あり。当時同業者の工場は、概ね光線不足なる室内に多数の工人を収容し、石油空函を職卓に代へ、漸く就業せしめ居たる状態に比すれば大に異れり。又富川町工場は幕府の旗下某大官の下屋敷を譲受けたるものなれば、庭内広く大池の周囲に築山を繞らし、奇石を配して大小幾多の樹木を植え、四季花を絶たず。瓢池園工場は、常に斯る用意の中に其の製産を行ひたり。

瓢池園が職工の保護待遇を厚くし、意を其の徒弟工人の教養に注ぎたるは、前述の事例により略推知するを得べしと雖も、尚伝ふべき一事あり。明治三十六年、大阪市に於て第五回内国勧業博覧会の開催せらるゝ

や、該地に宿舎を設け、往復旅費並に宿泊料を支給し、勤続二年以上の工員をして見学せしめ、而も全出品中自己に最も利益と感興とを与へたるものに対して、其の理由を附して意見を提出せしめ、着眼佳良なるものには賞金を与へて見学効果の十全を期することに努めたるは、是れ亦出色の案なりと謂ふべし。

瓢池園は一般陶器絵付業が家庭的小工業たりし時代より、之れを大工場製産組織となしたる後も、尚家庭工業の長所たる主従関係、温情主義の精神を尊重し、是れに由て大企業組織より生ずる欠陥を補ひ得たるものにして、陶画の優秀を世間に認識せられたると共に、工場風紀の模範的なりし所以、即ち茲に在りとなさん乎。

三　陶業界に於ける業績

一、陶画の改良

本邦古来の陶画仕法は、水溶せる顔料を毛筆に介して塗布せし故に、着色濃淡の不均一なるを免がれず。翁夙に此の点に工夫を怠らざりしが、会々明治七年八月、故納冨介次郎氏が官命を奉じて墺国に赴き、陶磁器製造の技術を伝習して帰朝するや、先づ顔料を松脂油にて溶き抽出する法を聞き、自家の画工に其の要領を伝へてこれを研究せしむ。当時材料に関する知識に欠け、之れを市井に求むるに幾多の不便ありしも、遂に成功して陶画界に新生面を開きたり。

凡此の種技芸界に於て新なる発明工夫は互に秘して他に漏さず、自ら独り其の利を壟断せんとするを常とせしが、瓢池園は規模敢て大ならずと雖も陶画模範工場を以て自任し、苟も新研究にして斯界を益するものあれば、直に広く之れを同業者間に告げて齊しく其の効益を頒たんとせり。されば松脂油の応用に在りても本邦に於て之が先鞭を着け、直に先づ都下の同業者に公開するや、横浜、名古屋に伝播し、遂に全国に行はれたり。是れ納冨氏に負ふ所ありしは勿論なれども、広く短日月に国内同業者間に普及したるは、蓋し翁の篤志に依りしこと大なり。

釉薬上の絵付には銅版印刷に附したる印画を素地に転写する方法あり。釉下素地に是を応用することは早くより知られたれども、釉上に応用する術は、明治二十二年、初めて五十嵐健次氏を介して瓢池園に実施せられしなり。此の銅版盛上画付法に因れば、描筆を以て成し難き細密なる紋様を容易に表し得るのみならず、大量の製作に適し、工程をして頗る簡捷ならしめたれば、此の法を直に一般同業者に伝へたり。其の他水金と称する金化合液の、完全なる使用法を一般に知らしめたる如きも其の一なり。

陶画様顔料の輸入供給今日の如く容易ならざりし時代に於て、素地の硬軟に応じ適当なる顔料を調整し、其の鎔融変化の度を攻究して素地より剥落することを防ぎ、紅色、紫色及褐色の顔料に就ては、殊に調整に苦心したるのみならず、焼成に於ても、薪材の選択及加熱の方法と相俟て之が成功を遂げしむるに数十回の失敗を重ね、遂に成就せしめたる如きこと少なからず。陶業の進歩遅々たる時代に在りて、克く陶画製作上、諸般の事項に渉りて常に研鑽を怠らず、只管進歩発達の為に尽したれば、明治十一年、第一回内国勧業博覧会に際して、特に龍紋賞牌を授与せられ、其の褒状中「同業者興廃常なきの際、孤立勉励して東京陶画の名誉を保ちたる功労卓越云々」の文句に由りて、其の全般を窺知するに足らん。明治十四年、第二回内国勧業博覧会の出品に就き有功賞牌を受け、該賞状には「海外の時好を探知して著図に注意し、流麗雅巧、個々愛す

べきものあり云々」と賞揚せられたるは亦以て其の風格を語るに足るべし。其の後明治三十五年まで我が国内に行はれたる勧業博覧会に於て、五回の賞を受けたる外、明治十一年、同三十三年、仏国巴里大博覧会、同四十二年、日英博覧会等に出品する毎に受賞し、自ら審査員たる時は之を辞退したれども、其の業績顕著なりとて表彰せられたること屢々なりき。

二、国立製陶所設置の建議

瓢池園は主として陶磁器絵付を業とせしが、翁畢生の希望は我国陶磁器の改良にありしなり。由来本邦陶磁器の素地は、脆弱にして欧州諸国産出の堅硬に及ばず、為に輸出は単に美術装飾品に止まりて、広く日用品に達せず、従つて需要の盛大を期すること能はず。是に於て海外の日用品に適する素地の、改良及研究の緊急なることを痛感し、夙に之れが必要を提唱せり。

翁は仏国巴里に開催せられたる、万国博覧会の用務を帯びて渡仏せること明治十一年、同三十三年の前後二回に及び、自費を投じて彼の国の精巧なる製品を齎し、これを一般製陶家に提示して持論の主張に努め、併せて一般の参考に供し、親しく見聞する所を告げ、其の発憤を促すこと多年なりしが、我国の陶業者は概ね祖先伝来の法を墨守して、容易に覚醒するに至らず。翁深く之を憾み明治十二年、知友両三氏と相謀り、株式組織によりて製陶工場を起し、我が陶業界に革新を策せんとしたり。其の設計敢て大なるものに非ざりしが、固より創立後直に収益を期すること能はざれば、当時資本家にして将来の大計画を想ひ、創業期の損失を忍ばんとする者なく、遂に空しく其の計画を胸裡に蔵むるの已むなきに至れり。

（一部落丁）

るものに非ず。会々陶業界に訴へて其の所見を披瀝したるもの左にあり。

徳川幕府三百年の泰平を維持せる間、諸般に於ては工人に一定の扶持を与へて各種工芸品の製作を奨励し、其の優秀なるものは幕府其の他高貴の許に献上して之を誇としたる領主あり。一般好事家も亦自己の意匠を凝して考案を工人に授け、労費を惜まずして製作せしめ、競ふて之を愛玩したる風あり。陶磁器も之が為に各地に特殊の佳品を産出し、其の製作は徐々に進歩し、曽て退歩したることなく、高尚優雅なる逸品を出したるもの亦少なからざりしなり。

現時我国に於ける陶業界の状態を見るに、一面著しく進歩したる点あると共に他面に退歩したる点あり。今や巧妙なる機械的装置を施して土石を精錬し、学術の応用により之が配合に注意して其の質を硬くし、其の色を白くし、価格の低廉なるを要する日用品は大量的に生産せられ、石膏型の利用、着色の発明等により、形状及色彩を自由ならしめ、海外輸出は累年盛況を呈し、産額大に増進したるは学者研鑽の功と、資本家の奮起に負ふ結果にして、国家のため慶賀に堪へざる所なり。

然れども近時、我が製品は本邦陶磁器独特の趣味を逸しつゝあるもの少からず。心ある者須らく其の妙趣に着眼して、濫に精巧佳麗のみを主とすることなく、高雅なる品位を維持し、且つ意匠、図案に新味を加へざるべからず。花瓶の如きは最も其の形状を尚ぶものなれども新作中、形状整ひ、気品高尚なるものは概ね古物の模倣に過ぎず。欧州製品亦然り。例へば千九百年、仏国巴里万国博覧会に於けるセーブル製陶所より出品したる花瓶は、大は六尺より小は三、四寸に至るま

で約五十点に達したれども、形状佳良にして傑出せるものは僅に七、八個に過ぎず。然も是等は何れも、支那若くば欧羅巴の古製品に倣ひたるものにして毫も新案の跡なし。

我が国の陶磁器は素地の製造、画付、彫刻の点に於て大に進歩したるにも拘らず、考案の丹精之れに伴はず、釉薬、色彩に新奇の発明あるも、製作上に効果を齎すこと少なし。之れに反して従来の習慣を守り小規模にして経営する製作家は、時勢の進運に伴はざるに反し、其の製品は却つて固有の面目を保ちて品位を失はざるものあり。日用の雑品と雖も美術的趣味に充つるもの尠からず。蓋し学術応用に忠実なる新進作家は、先づ欧風を採つて参考に資し、意を原質の改良に注ぎ、現今の如き優良なる実用品を生産するに至れり。其の努力は洵に仰慕すべしと雖も、形状、装飾も亦欧風に倣ふのみにして、本邦固有の雅致を失ひ気韻に乏しきを憾とす。仮令洋食器と雖も、図案、色彩の上に巧に日本趣味を加ふれば、必然内外人を喜ばしむるのみならず、広く外□[国?]市場に歓迎せらるゝに至るべきなり。

英国の製品が独逸より往々圧迫せられんとするは、実質のみを重んじ外観に無頓着なりしに因るものにして、独逸は夙に英国の陶工を聘用して素地の製造に従事せしめたるのみならず、之に加ふるに自ら巧妙、斬新なる意匠を工夫して、盛に世界各地に輸出し他国品と競争しつゝあるものゝ如し。我国は独逸と同じく北米合衆国を以て陶磁器の一大顧客となすものなれば、範を欧州に採り、原質を改良して、実用上の価値を重んずるのみならず、我が国固有の趣味をも発揮するときは、欧州製品に対して優勢なる位置を占むること敢て難きにあらざるべし。

欧州に於て製作せらるゝ優等品は、一般に艶麗なるも雅致に乏しきは人情風俗の然らしむる所なりと雖も、邦人は温雅なるものを悦び、一種独特にして言ひ表はし難き妙味ある製作を成すに適せり。然るに時勢は漸く此の趣味をも駆逐して、多くは俗気粉々たるものを製作するに至れり。一例を示せば、柞灰（イスバイ）を上釉に用ひたるものは、幽雅高尚なる色沢を保ち、永く之を鑑賞するも飽かず、之に反し、石灰を使用したるものは、一見美麗なりと雖も、愛玩久しきに堪へざるが如し。

近時欧米に於ては漸く東洋趣味を嗜好する傾向を生じ、嘗て巴里の美術展覧会に於て、優等賞を得たる高さ八寸の小花瓶は、一見往時東京市内の蕎麦店に使用したる討入徳利の形に類似し、口径細く下部は角形となり、鉄粉を以て七宝繋ぎ模様を描き、上部には緑色の釉薬を施し、恰も織部焼の如くにして其の作風尚之に及ばずと雖も、此の如き製作の推奨せらるゝは是れ明かに時好の変遷せんとする兆候なり。今や我が製作家は欧風の模作にのみ腐心し、本邦独特の妙味を忘れんとする間に於て、彼は却て我が長所を採りて之を応用せんとす。

我が陶業界が斯る状態に陥りたる原因は、明治維新に当り、悉く旧を捨てたゞ新に趨り、工人を保護し又は奨励する任に当るもの無く、美術骨董品を玩ぶ者は、多く俄作りの紳士或は成金者流の輩にして、優雅高尚の眼識なく、動もすれば青磁の花瓶を排して、金色燦然たるものを購はんとし、名工を顧みる者なく、殊に現今、本邦陶技の妙を極むる轆轤の巧なる者の年々減少するは、甚だ寒心すべき事態なり。又新進作家に一顧を求むべきことは、欧米人の到底思惟せざる我が製陶の妙趣、即ち流れ易き窯変釉を花瓶等の高台に於て、恰も剃刀を以て切断したる如くに、釉薬の流れを止まらしむる如き其の一にして、

故竹本隼太氏は窯変釉百余種を以て悉く形状を異にせる花瓶を製出し、是を千九百年巴里博覧会に出品したることありしが、此の多数の内一個たりとも釉の流出したるものを見ず、其の技倆の鮮巧なりしは、好事家をして少なからず驚嘆せしめたり。此の世界的大博覧会に賛同したる三十余ヶ国の出品中、類似の釉薬を施したるものを求めて精査したる結果、氏の作品に於けるが如く鮮麗端正なるものなく、流散したるものに非ざれば、皆悉く其の跡を研磨して修補せるものゝみなりき。氏の技倆は当時に於ける陶工界の重宝にして、之に比較すべき名工には尚宮川香山翁あり。

我が陶業家が素地、焼成を工夫するには、欧米の長所を採り、形状、絵画、彫刻等の意匠と、其の表現仕法には、優雅高尚なる国風の趣味によらんことを望み、之を需要する者は多少の美術眼を具へ、日用の雑品は暫く之を措くも、盛饌に供用し、或は愛玩装飾に属する器物に就ては、意匠の優良なるものを選奨し、常に名工を擁護せんことを切に望んで止まざるものなり。

四　工芸界に於ける事蹟

一、内外博覧会に於ける活動

我国が外国博覧会に賛同したるは、慶応三年、仏国巴里に開ける万国博覧会に、幕府及肥薩二藩が少数の出品を以てしたるを嚆矢とす。時の渡欧者は始めて欧州諸国の文物に接触し、商工産業の隆盛なるには全く驚嘆したりと云ふ。次に明治六年、墺太利首府ウィーンに於て万国博覧会の開設せらるゝに際し、政府は直に賛同を議決し、是がため前年一月より特に事務局を設けたり。此の時翁は出品課御用掛を命ぜられ、同じく六月、同局附属製陶所主任に挙げられたり。之れ実に其の生涯を通じて博覧会に関係し、勧業に従事したる端緒なりしなり。

翻つて本邦に博覧会が開催せられたるは、明治十年、東京上野公園に行はれたる第一回内国勧業博覧会を以て嚆矢とす。翁は其の事務局に出でて、諸規則の編制より陳列の細事に至るまで鞅掌せり。爾来政府或は公私諸団体の経営に係るものには殆ど皆参与したり。外国博覧会に就ては西暦千八百七十三年、澳国博覧会より千九百十年、日英博覧会に至るまで、我が政府の賛同したるものに一として関係せざるはなし。殊に明治十一年、同三十三年の仏国巴里に開催せる万国博覧会には、審査官として列国製品の審査に従事せり。斯の如く前後四十余年間、内外博覧会、共進会、品評会等に参与したること無慮百数十回の多きに及べり。実に諸名士と共に、我国に於ける博覧会通の一人と称せられたるも偶然にあらざるなり。今其の主なる経歴を掲ぐれば左の如し。

明治　五年　一月　澳国博覧会御用掛　（澳国博覧会事務局）
同　八年　八月　米国費府万国博覧会事務官　（内務省）
同　九年　八月　第一回内国勧業博覧会事務取扱　（内務省）
同　十年　一月　仏国巴里万国博覧会事務取扱　（内務省）
同　十一年　四月　仏国巴里万国博覧会審査官　（内務省）
同　十二年　七月　第二回内国勧業博覧会御用掛　（内務省）
同　十四年　二月　第二回内国勧業博覧会審査官　（博覧会事務局）
同　十八年　三月　東京府繭糸織物陶漆器共進会審査官　（農商務省）
同　十八年　三月　東京市工芸審査委員　（東京府）
同二十一年十一月　岐阜県陶磁器共進会審査長　（岐阜県）
同二十三年　三月　第三回内国勧業博覧会審査官　（博覧会事務局）

同二十八年　三月　第四回内国勧業博覧会審査官　（内閣）
同三十一年　三月　第三回全国五二会品評会審査官　（農商務省）
同三十三年　五月　仏国巴里万国博覧会審査官　（臨時博覧会事務局）
同三十五年　三月　第五回内国勧業博覧会審査官　（内閣）
同三十六年　九月　臨時博覧会鑑査官　（内閣）
同三十九年　四月　凱旋記念博覧会審査官　（農商務省）
同　四十年　三月　東京勧業博覧会審査官　（農商務省）
同四十二年　十月　日英博覧会鑑査官　（農商務省）
同四十五年　四月　第十回関西府県連合共進会審査官（農商務省）
大正　三年　四月　東京大正博覧会審査官　（農商務省）

以上は大規模に行はれたる博覧会、共進会等に就き官庁の嘱託任命に係るものゝみにして、他に府県市又は公私団体の主催せる大小幾多の各種展覧会、品評会等に就ては枚挙に暇あらず。殊に明治三十五年、京都に移住したる後は、毎年春秋同市に於て開催せられたるものゝ外、各地方の共進会に審査の嘱託を受け、且諸般の美術工芸品及絵画に、図案に、或は食料品の如きに至るまで、随時間断なく品評鑑識を依嘱せられたり。

我が政府が澳国博覧会に賛同し、内外物産の比較研究が当時未だ幼稚なりし本邦産業の開発に画期的光明を与へたるを見て、博覧会の開設は明治維新後我が国諸産業の開発及奨励に多大の効果あるものと認め、明治八年、澳国博覧会事務終了後、内務省勧業寮に出仕するや、爾来専ら其職に当り拮据励精せり。明治十二年十二月、瓢池園の業務に全力を注がんため、辞職退官したる後にありても、博覧会の事業には私事を擲ちて参与し、公益を計るに独り陶業界のみならず、工芸会全般の改善進歩を念とせり。其の審査に従ふや周到綿密、会務を分担するや熱心努力、時としては狂せるものゝ如し。殊に我が賛同する外国博覧会に対しては優秀なる出品を勧誘し、恒に能く劇務を処理して毫も倦むことなし。

斯の如くにして商工業者の間に介在し、一々懇篤なる忠言を試み、或は各地の講演に生産品改良の方針を指示するのみならず、販売上に不親切なるものあれば面識なき者と雖も、会見若くは書面によりて直に其の非を戒め、専心我が国商工業道徳の振興を唱道し、改善を叫号して止まざりき。

明治五年以来、内外博覧会に従事し、日夜鞅掌尽力の労を賞せられ、同十年十月及十一年一月、芝離宮に、同十三年六月、吹上禁苑に於ける賜宴に召されたるは、布衣の最も名誉としたる所にして、且明治二十三年十一月、藍綬褒章を、同三十六年十二月、再び同章飾版を下賜せられ、多年内外博覧会事務に関係し、単に陶業に止らず、広く美術工芸の発達に尽力したる旨の功労を表彰せられたり。其の初回は我国褒章条例制定後、陶業家として第一に藍綬褒章拝受の光栄を担ひたる者なり。此の他明治三十四年七月、仏国政府より贈与せられたる「オフイシエー、ダカデミー」勲章の佩用を允許せられたるのみならず、金牌銀牌若くは慰労金を下賜せられ、或は感謝状を交付せられたること数十回に及べり。

翁は博覧会を利用して、幼稚なる我国諸工芸を開発指導せんとする所見なりしを以て、出品を審査するに当りては、賞級の等差を個々に区別するのみを以て足れりとせず。出品全般に亙り、製作技術に関しては勿論、営業状態に至るまで精査し、常に斯業に対して改良の指針を示し、或は用途を新に攻究して販路の拡張を図らしむる等、独り其の出品人のみならず普く同業者に告知して、将来の方針を過たざるやう其の意を尽したり。偶々出品人中その審査擬賞に不平を抱く者ありと聞けば其人に

就き、現品と他の成績佳良なるものとを比較して一々其の長短を指摘し、その誤解を正さずんば止まず。斯くして大に製品の面目を改めたるもの少なからず。蓋し陶磁器及家具、装身具その他種々の工芸界に翁の名を伝へられたるは、其の鑑識よく実際に即して誤らず、指導懇切を極めたる故なりと謂ふべし。

斯くて翁が博覧会に於ける最後の活動は大正三年、東京に開かれたる大正博覧会にして、当時在京の子息及女婿諸氏も亦審査官の職を帯び、各専攻の部門に就て会務に参与せしかば、大に之を悦び斯の如きは既住四十余年間幾多の博覧会生活中、曽て享有せざりし怪事なりとし、本博覧会の審査使命を近親相共に楽しむこと満足何物か之れに若かん。今や世運の進展に伴ひ、常識経験に富める士其人乏しからざれば、老躯敢て事に当るを要せず、奉公を終へて後事須らく新進諸家に委ねんと謂へり。言果して讖をなし、同会終局後月余にして遂に他界せり。

二、実業団体に対する斡施

明治初年、我が政府は鋭意内外政務の整理改善に忙殺され、未だ産業の奨励に尽すべき余裕なかりしが、明治六年、澳国主催万国博覧会に参加するに際し、我が海外貿易振興の最も急務なることを認め、政府は国内の商工業者に欧州産業視察を勧誘し、渡航中家族の生活費を支給する優遇方法を講じて奨励したるも、多年馴致せる鎖国的思想により、海外渡航を希望する者殆ど皆無なりしなり。翁は此頃より本邦の特産品たる絹織物、陶磁器、竹細工の類は輸出品として有利なることを看破し、輸出の途を説きしも大声俚耳に入らず。視察はもとより、欧米輸出のため意匠及製造法を改めん事は煩瑣なりとし、業務の発展を企図するもの甚だ稀なりき。

其の後漸く本邦製品の海外諸国に名声を博するに及び、横浜、神戸其他の開港場に居留せる外国商人の注文に応じて輸出向商品を製作し、漸く拡張の機運開かるゝに至りたるも、古来我が国には士農工商の階級ありて、自他共に商を卑み自然商業道徳の発達を阻害せしこと鮮少ならず。明治維新以来、制度文物の発達したるに拘らず、尚此の陋習は容易に抜け難く、貿易業者の多くは唯眼前の利益にのみ趨りて、永遠の利害を考慮する者尠なく、外商間の取引に信義を尽さず、延ひては同業全般の信用を毀損して顧みざる者あり。翁は輸出品の製造に従事して這般の消息を解し、又新しく欧州の地を踏み、彼我商工業界の長短を見るに及び愈々我が斯界積年の弊風を矯正せんと企てたり。

明治時代、我が実業界の恩人たる故前田正名氏も亦夙に本邦産業界の前途を憂ひ、明治二十四年、農商務次官の栄職を退き、全国に遊説して実業団体の組織を勧告するに遇ひ、多年同氏の知遇を受けたる翁は、同志と共に同業組合法制定の建議を農商務省に提出し、遂に議案として第六議会に上程せられたり。此の時我が言論界に勢力ありし、時事新報及実業界の重鎮たりし某々氏等は激烈に反対し、該案は人権の自由を害し且産業自由の主義に悖るものなりと叫号せり。翁は其の通過稍危きを見て、同士と共に昼夜を分たず奔走すること約十日間、貴衆両議院を歴訪し、その緊要なる所以を力説して懇切に協賛せられん事を求めたり。至誠を以てせる該運動は遂に効を奏して無事両院を通過し、斯くて我が同業組合法は明治二十九年三月、其の発布を見るに至れり。

其の発令は一般実業界に多大の功益を齎すものなりとし、関係者等は同年四月東京市に於て盛大なる発布祝賀会を挙行し、従前の組合準則に依りて組織したる東京市内百三十余の各種団体は、悉く之に参加し、祝

賀会当日は各業組合一斉に休業し、職工徒弟に至るまで式場に参集する者其数無慮五万、各組合毎に幡旗を翻して隊伍堂々、桜咲く会場上野公園に向つて行進し、或は花山車を曳出し囃子を入れ、楽隊を引卒(ママ)して場内に繰込み、真に意気昇天の概あり。其の真摯なる態度は現時不真面目なる労働者団体行動の比に非ず。不忍池畔式場の盛観は言語に絶したり。是れ即ち当業者自ら明に同業組合の必要有益なる事を認めたるものにして、故前田正名氏を初め、多年該法案の制定を要望したる有志者をして頗る感激せしめたり。斯の如く祝賀会の盛大なるに従ひ、各種組合員中には或は思慮足らざるものありて、酒気に乗じ該法案に反対したる人々に対して、暴行を演ずるやも測り難きを憂ひ、祝賀会委員一同と謀り、用意周到なる取締を励行し幸に事無きを得たり。其の日上野公園会場の盛観、雑沓を極めたる実況は、当時幼少なりし筆者の今尚深く脳裡に印象して、厳父得意の状を今に能く眼前に躍如たらしむ。

同業組合法の発布に先立つこと数年、東京市内陶磁器商工業者は組合準則によりて各其の組合を設け、翁は陶磁工組合頭取の任に就きたり。斯くて新令により互に密接なる関係を有する当該商工業者間に、合同組合の組織を勧告して屢々協議を重ねたれども、議論百出して容易に決せざりしを以て、先に陶工業者のみにて組織したる組合を、新令に準拠して東京陶磁工同業組合に改めたり。而して翁は其の組長に挙げらる。明治三十四年四月、退職に当り組合より創立以来十余年間、辛苦処理して同業の発展を図り、時々組合員競技会を催し、常に製作に就き懇切なる指導を怠らざるなど、其の功労に対し感謝状と共に銀盃一個を贈られたり。

尚此の前後に於て、東京雑貨貿易商組合及東京陶磁器問屋組合に於ける理事の一員となり、又日本美術協会、大日本窯業会及五二会等の創立に際して大に尽力する所ありき。明治三十五年、京都に隠退したる後は故金子静枝翁と共に京都美術協会の会務を掌理せり。大日本窯業協会は陶磁器、硝子、セメント煉瓦等各種窯業に関する学者、技術家及当業者の、親和と斯業の進歩とを期図(ママ)するものにして、其の附帯事業として明治三十四年、第一回窯業品共進会を東京に開催せり。これ現今漸く高唱せらるゝ各種専門展覧会の端緒にして翁は常務委員となり、開会前後約五ヶ月間諸般の会務を処理したりき。此の時初めて出品物は審査品を除く外任意即売の方法を採れり。されば観覧者殺到し、会期二ヶ月間即売部は屢々出品物を補充するも尚足らず、終には多数の予約注文に応じたるものあり。各地方の製造家は是によりて東京方面に於ける時好を明にし、或は新に販路を開き我が国窯業家の散布状態及現況を知らしめ、一般観覧者及出品会員に十分の満足を与へたるは、博覧会に対する豊富なる経験と識見とに基きたる、周到なる計画が這般の成功を招来せるものなりと謂ふべし。会期中　英照皇大(ママ)后には斯の種の催に対し破格にも行啓を仰出され、忝なくも特に拝謁を賜はり、出品物に就て親しく御説明申上げたるは、翁が終生の光栄として深く感激措く能はざる所なりき。

五　性行と趣味

翁の性行は既に述べたる所によりて略その全般を窺ふに足らん。惟ふに生来頗る義侠心に富み、製作工業に関し苟も社会公益の為めならんには身を挺して之に赴き、喜んで事に従ひ粉骨砕身の労を惜まざるにあり。又天災異変に罹れる者あるを聞けば、財嚢豊かならざる中より率先義捐を惜まず。所蔵の陶磁器、図書、標本等にして参考となるべき場合は、

喜んで学校、博物館或は図書館に提供し、新聞紙上孝子節婦にして貧困真に同情すべき者あるを伝ふる時は、窃に金銭財物を与へて慰籍することあり。若し翁の生涯に勧業の事なかりせば、或は慈善公共の事業に対して亦同様の尽力を惜まざりしならん。家庭にありて常に自ら箴とせし所は左に掲ぐる司馬温公の言、即ち是なり。

積レ金以遺二子孫一　子孫不レ能レ守
積レ善以遺二子孫一　子孫不レ能レ続
唯積二隠徳冥々之裡一以遺二子孫一
子孫為二長久之謀一

翁性淡白にして煩雑を厭ひ簡明を喜びたり。工人或は故旧の懇請に応じて一時の急を救ふことあるも、敢て借用証を徴せんとせず。一に其の徳義心に委ね、返済せざるも敢て深く之を問ふことなし。然れども商工業者にして製品の製作販売上に不正なる行為又は不親切なる点を発見すれば、直に其の矯正を促し、忠告すること再三再四、之を反覆するも改めざれば止まず。博覧会を初として各種団体組合等の事務に関与するや、規則条文の煩瑣多端なるを避け、総て規定は十分に実行し得べき簡単明瞭のものに止め、能率の増進を図り、徒に権利義務の説を主張し、自他を苦しむるの愚を排せり。蓋し翁は最も良く教養せられたる芸術趣味の下に、江戸子気質を円満に発揮し得たるものなるべし。

翁は幼より俳諧を好む。七歳の頃嘗て外祖父渡邊田龍翁が君命を帯び京都に旅し、恰も箱根を超ゆる日、江戸市中稀なる大雪なりしかば、「祖父さまはこの大雪に箱根かな」と詠じて傍人を驚嘆せしめたり。年稍長ずるに及び初世夜継庵に学び、師の没後二世夜雪庵金羅翁に就て大に研鑽し、慶応二年秋宗匠の格に進み、師命によりて先師の跡を継ぎ二世夜継庵得之と号せり。其の句作は旧派の陳套に染まらず、新派の珍奇に走らず、中正温健なるもの多し。

寄紙祝　鳥の子も八千代を祝ふ茂りかな
硯　師の坊も記念涼しき硯かな
牡丹　散る牡丹蝶も眠りを覚しけり
朝顔　朝顔やその日の露を抱いて咲く
蚊遣　何焚きて仏師が宿の蚊遣かな
初秋　初秋や流るゝ星の二つ三つ
月待　芋ほりに僧都の来ます月夜かな

翁は園芸、音楽、観劇を好み又料理の法にも通じたり。総て勝負を争ふ遊戯を好まず、子女に対しても常に之を厳禁せり。喫煙は若年より好む所なりしも、晩年に至りて全く之を絶ちたり。

明治三十五年、瓢池園工場を全部名古屋に移すと共に、之が管理を長子に委ね、同年八月家族と共に京都に移住し、同三十九年初春、洛東白川の畔に地を相して新居を設け、「嵐雪の蒲団の端を仮寝かな」の句あり。翁積年の宿志を遂げ、京洛の地に閑居して其の風光を愛で、句作に耽り、或は園芸に親しみ、殊に牡丹及朝顔を愛養せり。

散るまでに伐おくれたる牡丹かな
さし向ける灯を照かへす牡丹かな
朝顔にめでゝや今日の朝曇
朝顔の凋みもやらず秋の暮
水澄みて白川はしの夕まぐれ　友まつ虫の音ぞたのしき
ひさき来る虫の初音に誘はれて　あすは嵯峨野を訪はんとぞ思ふ

斯く閑寂の境地にありても唯無為に余生を送りしに非ず。京都及関西

各地に博覧会、共進会等の開催せらるゝや、其の嘱託に応じて顧問となり、老躯を押して審査に従事し、改良進歩の成績如何を見るを無上の愉快となし、殊に美術工芸品及其の意匠、図案を展覧し、之を品評するは最も好む所にして、此種の会合には常に出席を怠らず。大正三年八月二十五日、夕陽の暑熱尚甚しきをも意とせず、京都遊陶園の例会に赴かんとし、家族と共に食事を終へたる時忽ち頭部に異状を訴へ、数分にして意識を失ひ、齢七十一歳、脳溢血症を以て同二十八日夕遠逝せり。遺骨を東京谷中の塋域に葬り、洛東南禅寺金地院の境内東照宮廟の後方に分骨建碑せり。

瓢池園が明治十五年前後三箇年、海外貿易頗る沈衰して多大の損失を重ねたる時、渇しても尚盗泉の水を飲まざる意気を固守して、製作の方針を内地用品に転ずることなく、工人を慰撫激励して其の苦境を突破し得たる克巳、忍耐の性は、少時水泳と歩走に就き深く練磨して、その気力を養成したるものなりと謂ふ。

嘗て上洛中の徳川十五代将軍慶喜公に従ひ淀に赴き、帰途天候急変して雨を催すや、馬上の将軍雨具を纏はず一鞭を加へて疾行し、騎乗随伴の諸大夫の外、徒歩の士は忽ち隊伍を乱して殆ど落伍せしに、翁は将軍の副刀を捧持するの任に当れるを以て、列に後るゝは恰も主に背くが如しと惟思し、日常の鍛錬を現はすは此の秋なりとし、渾身の勇を奮ひ自らは両刀を帯ぶる身を以て数里の間副刀を捧持し、将軍の二条城に達するまで歩走随伴せり。此の日翁と同一の行動を完うし得たる徒歩の士は、僅に三名に過ぎざりしこと将軍の上聞に達し、其の勇を賞せんと翌朝上職より特に出仕の命を伝へられしも、翁等長途疾走のため、帰宿平臥したる後は両肢緊張して寸時も正坐に堪へざりしを以て、止むを得ず登城の命を拝辞し、特に三日間の休養を賜はりたる事ありと云ふ。

又明治三年八月、駿河田中城内に閑居中、所要ありて東上したることあり。帰途富士川に至るや河水汎濫して三日間交通不能なるべしと聞き、上流の架橋を渡らんとし翌朝匆々旅宿を出で、約八里の道を迂廻し、幅僅に三尺、長さ三十余間の梯状釣橋に達し、渡橋を試みたるに、両岸を連結せる索条は左右に振動すること甚しきのみならず、脚下の奔流は心胆を寒からしむるものありしかば、直に逆行して携帯品を悉く背部に負ひ、その飛散脱落を防ぎ、匍匐して漸く対岸に達するを得たり。此の時対岸に佇み之を望見したる老農夫は、翁が渡橋の終るを待ち言を発して、血気の勇に走らず其の細心なる注意を賞し、無事の渡橋を祝したりと云ふ。

是より間道を西に進みたりしが時既に午刻を過ぎ、切りに空腹を覚えたれども、人家稀にして粟黍の外に米麦を備へず。菜圃に一老婦が芋を採取せるを見て其の分譲を乞ひしが、未だ祖先の霊に供へざるを以て武士たりとも与ふべきに非ずと云ひ、断乎として拒絶せられ遂に中食を求むること能はず。唯懐中に残れる少許の金平糖を口にし、殆ど二十里の難路を踏破し、夜に入りて山村の陋屋に一泊するを得、翌朝更に行くこと数里にして本道に出で、折から飛脚の東より西するものに遇ひ、其の朝富士川の水勢稍々減退し、渡船にて漸く通過し得て急行し来れるものなりと知れり。是によれば翁前日の行動は全く徒労の如く見ゆれども、生来初めてかゝる難行を体験したるは、旅宿に一日閑居するに優り、たゞ間道を迂廻するに当り、午食の携帯に留意せざりしは一大失策なりと聞けり。蓋し翁晩年に至るまで、各種工芸の発達に尽さんため東奔西走し、尚元気旺なりしは、全く少壮時代鍛錬の致す所に因るものなるべし。

翁に五男二女あり。男を太郎、次郎、三郎、祿四郎、五郎と云ひ、各其の志す所に委せて、敢て之に干渉することなし。長子太郎家業を継ぎ、大正十一年二月、五十四歳を以て亡父の跡を追ふ。次郎は農学殊に蚕糸に関する学術を修め、出でゝ広瀬家の嗣子となる。三郎は家父の遺志を継ぎ、故大倉孫兵衛氏等の心血を注がれたる日本陶器株式会社の創立に参与し、後年更に日本碍子、東洋陶器株式会社其他、我が国著名なる陶器工場の建設に関与従事せり。百木姓を冒す。祿四郎は電気業に、五郎は教育界に身を投ぜり。長女三千代は真木氏に、次女五百枝は赤池氏に嫁ぎたり。以上六人の児輩が、八十二歳の高齢を重ねて今尚矍鑠たる慈母の膝下に、会する毎に往時を追懐し、昔日の労苦を忘れて団欒の楽しみを享くるも亦、厳父の余徳にあらざるはなし。不肖先考の小伝を録し、筆を擱くに臨んで、景慕の情更に切なるものあるを覚ゆと云爾。

昭和四年十二月　二十日印刷
昭和四年十二月二十三日発行　（非売品）

編輯者　河原　五郎
福岡第一実業専修学校
印刷者　紫藤京太郎
福岡市簀子町七四
印刷所　紫藤印刷所
同所　電話三五三三番